

川の子ども新聞

もっと知りたい川のはなし



もっと知りたい 川には「神さま」「カッパ」もいる??

川はむかしから人びとのくらしとふかくむすびついていた。その「人と川とのかわり」の中から、いろいろなおはなしが生まれた。「水の神さま」「カッパ」も、そのひとつなんだ。

さまざまな「水の神」たち

日本には、いろいろな水の神さまがいる。池のほとりなどの水へには「弁天さま」という神さまがまつられていたり、井戸には井戸の神さま、川には川の神さまがまつられていたりする。そういう神さまをまつる、小さな家のかたちをした「ほら」を見たこと、あるんじゃないかな。

日本は海に「まわれ、たくさん川が流れ、また、むかしからお米をつくるためにたくさん水を必要とした。だから、もともと水とかがわりがふかいし、水をたいせつなものと考えてきた。そこから水の神さまの信仰(うやまつり)信じて、とうとう「水」が生まれてきたといわれている。

そのような水の神さまは、もともとはひとつだったらしい。それが時代とともにさまざまに分かれて、「川の神」「泉の神」「海の神」...などになったというわけだ。

「水の神」は女のひょう?

『日本書紀』という古い書物には、「ミズハノメ」という水の神さまが登場する。「ミズハノメ」は女の神さまなんだ。

はじめに書いた弁天さまという水へにまつられる神さまも、女のひょうのすがたであらわされている。ちなみに弁天さまは、もともとインドの神さまで、日本では七福神のひとつになつてきているね。

それから、日本の各地には「機織淵」といって、水の女神が、ふかい水の底で機を織っているという伝説もあるんだ。さらに、「このよつな水の女神には小さな子どもがいて、その子にはフシギな力があり、福をもたらす」という信仰もある。

たとえば、「桃太郎」「一寸法師」「瓜子姫」などのむかしはなしは、みんな「水」とつながりがあるね。

へび、ワニ、カメが神さま?

川には「ミズチ」がすんでいる、という伝説がある。この「ミズチ」というのは、へびに似ていて、足が4本あり、長さは3 とちも24 とちもいわれ、大雨をふらす怪物のようなもので、水の神さまとも、その使いともいわれている。

なんとなく竜のようなもの、ほかに、へび、そのもの、それから「ワニ」「カメ」「カエル」「ウナギ」「タニシ」などなど、さまざまな生きものが水の神さまのすがたとして考えられているんだ。



カバつて、ほんとつに水の神さまなんだらうか? これも、いろんな説があつて、はつきりこうだと言いきれない。ただし、カッパと水の神さまがとてもふかい関係にあることはたしかなようだ。地方によっては川のおまつりをするとき、カッパを水の神さまとしてまつっているところもある。

それから、カッパが「キエウリ」が好き、「すもつをとるのが好き」という言い伝えも、水の神さまのおまつりと関係しているらしい。あるおまつりでは、キエウリがそなえられたり、子どもたちがすもつをとつたりするんだ。

もうひとつ、「カッパの駒引き」といって、カッパが馬を川にひきこむ伝説が各地にあるけど、これもむかし、馬を水の神さまにささげたなごりともいわれているんだ。

80以上もあるカッパの名前

カワタロウ、カワノ、カワランベ、ガタロウ、エンコウ、ミズシ、メドチ、スイノヒ、ウスベ、キジムナ...

カッパの伝説は、北海道から沖縄まで全国にあ

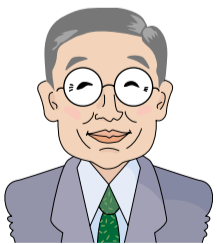
洪水のあとにまつを手伝ったカッパ

カッパの伝説は全国に数えきれないほどある。そのうちのひとつをしようかいしよう。

江戸時代の天明6(1786)年のこと、大雨によつて川の水があふれ、江戸の下町は大洪水となった。そのあともなかなか水がひかなくて人びとはこまつていた。そのとき、隅田川のたぐさの川ッパたちがあつまり、水はけの工事を手伝つたというんだ。

このはなしは、東京都台東区の曹源寺というお寺に伝えられている。

カッパが工事を手伝つたあたりには、その後、橋がかげられ、かは橋と名づけられた。その橋がなくなつたあとにも名前はのこつた。そのなごりのひとつが、浅草にある「かは橋道具街」(いろいろな道具を売る有名な商店街)なんだ。



板橋先生からひとこと みんなも、自分の住むまちやむらにどのよつなカッパの伝説があるか、しらべてみよう!